

プレイバック

第53回全日本プロボウリング選手権

わだち

二人の証言で振り返る激闘の軌



昨年のプロボウリング男子最終戦『第53回全日本プロボウリング選手権大会』(2019年11月29日~12月1日・新狭山グランドボウル)は、2連覇を目指す永野すばる(40期・相模原パークレーンズ)と、優勝に逆転での3冠(ポイント・アベレージ・賞金)がかかる川添奨太(49期・東名ボール)による、技術の粋を尽くした死闘だった。その闘いを、二人の証言で振り返ってみる。

川添奨太VS永野すばる

●再優勝決定戦

Scoreboard for the final match between Kawasumi Shota and Nagano Subaru, showing 10 frames of scores and pins remaining.

序盤の流れは川添に

アベレージで200を上回ったのが4名だけという難コンディションで行われた今大会。とくに決勝ステップラダーは、「ミディアムオイルで行われた最終日の準決勝は、例年よりメインサイドからスタートしている選手が多かった。だからそこが削れて、どんどん中に入らないといけない状況になった」と振り返った永野。その永野が、予選の14位からまくって2年連続のトップシードを獲得。3位通過の川添奨太が4位決定戦、3位決定戦を勝ち抜いて、永野への挑戦権を手にした。



▲「再優勝決定戦は、終始レーンがわからなくて、パニック状態の中での投球だった」と永野

優勝決定戦は、川添が7フレからのフォースで201:172と制して再優勝決定戦に持ち込んだ。

「自分の戦略としては、ロフトをしないでストロークで行かせてポケットを突こうと思っていた。でも4位決定戦、3位決定戦の間思った以上に球が行かなくなっていた。途中でラインを変えたり、違うボールも試したけど、結局このボールで

ここというのが、見つけれないまま、再決定戦に入ってしまった」と永野。

「優勝決定戦の終盤でレーンをしっかりつかめていたので、正直自信を持って入れた」と、1フレからターキーで絶好のスタートを切った川添に対し、永野は2フレ「ちゃんとラインがわかっていないので、縮こまって思い切って出しにいけない」と、ビッグフォーでオープンを作る。「川添プロが優勝決定戦の終盤に、手前をロフトで飛ばしてラインが出ていたので、やばいなと思っていたけど、頭からバシッところれて、プレッシャーを感じていた」

「序盤でリードを奪って逃げ切るのが自分の勝ちパターン。簡単にストライクが続くレーンではないし、流れはこちらにあると感じていた」川添だが、勝負は一筋縄ではいかない。

「4フレは、ポケットに入れるだけのボウリングをしてしまった。ストライクを狙いにいくのではなく、守りに入った一投」。その心の迷いが5フレの投球にも影響したか、真ん中に入ってビッグフォー。「そんなに感触は悪くなかったけど、4フレの入り甘かったので、しっかり投げようとした感じがあった。またこのあたりから、左レーンのオイルがどんどん無くなってきていた」

5フレにストライクを持ってきた永野は、苦しんでいる左レーンの6フレを投球する前に、リセットボタンを押して間を取った。「気持ちを落ち着かせるためと、ちょっと考える時間が欲しかった。確信を持って投げたわけではないけど、ストライクになってうれしかった。このレーンだから、プレッシャーをかけられればまだわか

らないと思っていた」。さらに7フレのストライクでターキーとし、勝負を振り出しに戻した。

同ピンで10フレ勝負へ

8フレをともにスペアのあと、永野の9フレは「中途半端になるより思い切って飛ばしにいったら、飛びすぎてスピードが乗らずに裏にいった」と①③⑨を残す7本カウント。一方の川添も、「ここでストライクを持ってくれば、カウントでもかなり有利になるという思いが力みになって、そのせいでボールが行かなかったと思う」と、③⑥⑨⑩を残す。

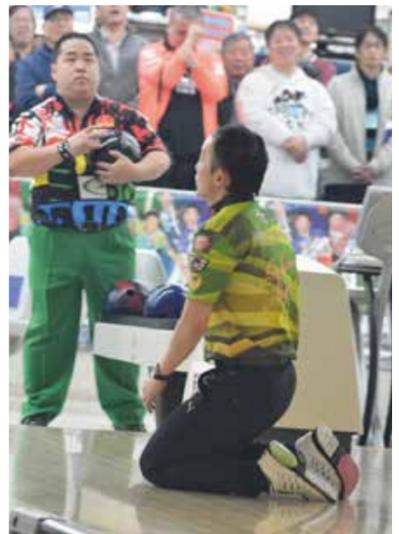
「①③⑨を取るにはポケットを狙わないといけない。でもポケットに入れるアングルがわかっていなくて苦しんでいる状況で、どうやって取ろうかと悩んだ結果、スペアボールでまっすぐ狙ったけど...」①番ピンはかすめただけでオープン。ここで負けを覚悟した永野だが、川添もやっかいなピンを残していた。

「スペアを取るには、1投目

のボールじゃないと後ろのピンが倒れない。でも1投目のボールだと2本になる可能性がある。そうすると1ピンビハインドで10フレなので、ここは3本取る方法を考えた。10フレは永野プロが左レーンで、合わせるのが難しいだろうなと思ったし、自分は右レーンで、思ったところに落とせばストライクになる確率が高いという読みもあった。スペアボールで、後ろが倒れてくれたらラッキーぐらいの気持ちで投げた」2投目は、予想どおり⑨番ピンを食わずにオープン。168:168の同ピンで10フレ勝負となった。

先投げの永野は「プレッシャーをかけたいところだけど、いかんせんラインがわかっていなかった。ちょっとカンド内ミスをしてしまった」。それを見ての川添の1投目は会心のストライク。ダブルば決まりの2投目は、「4フレと同じように、ポケットに入れにいったら、フォームが硬くなった分、⑩ピンが飛んでくれなかった。でも自分のなかではオーケーだった」

ストライクならプレーオフの可能性もある永野の最後の1投は「1投目の内ミスを繰り返さないようにと思ったけど、リリースが甘くなって薄め。ボウリングあるあるってやつです。それにしても最後までレーンをつかめなかった」と、6本カウントに終わり、この



▲同ピンで迎えた10フレだったが、はっきりと明暗が分かれた

時点で勝負は決した。

●永野の回顧

言い訳になるけど、準決勝用に曇らせたボールを、もう一度ポリッシュできる状況にあれば、もう少しいい戦いができたと思うので、ちょっと悔いが残ります。でも9フレのお互いのスペアミスのとき、お客さんから拍手が起きたんです。初めての経験だったけど、コンディションの難しさを理解してもらっていると思って、勝ち負けは別にしてくれよかったですね。

●川添の回顧

目一杯インサイドに入って、手前を飛ばして投げるようなボウリングを、アメリカに挑戦する前にできたかという、正直できなかったと思います。ただPBAツアーでの優勝を目標に掲げている以上は、このレーンで彼らが投げたらと想像すると、まだまだ足りない部分が多い。とくにこういう難しいコンディションになったときの、メンタルの未熟さを思い知らされたゲームでした。



▲隣のレーンからガターを飛び越すような究極のアングルの投球も「アメリカに挑戦してきた成果の一つ」と川添